



校長室だより

2022年 3月 4日

校長 小崎 功二
こさき こうじ

メリー・ポピンズ

『メリー・ポピンズ』は、ウォルト・ディズニーが製作を担当した1964年のアメリカのファンタジー映画です。私は、27年ほど前に娘のためにVHSビデオを購入して、初めて鑑賞しました。子供向けのファンタジーではありますが、教育に携わる者として強い示唆を受け、それ以来、子供たちと接する際に、心に留めています。

<あらすじ>

メリー・ポピンズの舞台は、1910年のロンドン。美しい桜通りには、厳格な銀行家バンクス家の4人が住んでいました。バンクス家には幼い姉弟がいましたが、銀行家の父も女性参政権運動に夢中な母も多忙で、子供は全てナニー（乳母、教育係）任せ。しかし、2人の子供はいたずら好きで、雇ったナニーはすぐにやめてしまう始末です。

そんなある日、バンクス家にやってきた若いナニーが、この物語の主人公メリー・ポピンズ（ジュリー・アンドリュース）です。メリー・ポピンズは、子供部屋を魔法で片付けたり、不思議なカバンから次から次へと色々な物を出したり、散歩中、大道芸人が描く絵の中に入り込んで遊んだり等、不思議な力を持っていました。そんなメリーを、子供たちはとても好きになって、他の使用人や母親もその魅力に惹きつけられ、家中がとても明るくなりました。しかし、しつけに厳しい父親は、陽気なメリーになかなか心を許しません。

その後、あることがきっかけで父親は銀行をくびになってしまい落ち込みますが、メリーから聞いていたおまじないの言葉やジョークで明るさを取り戻します。父親は、メリーに教えてもらったジョークに助けられて銀行に戻る事ができたのですが、その間、仕事から離れてみたことで、仕事よりも家族が大事なことに気がきます。

すっかり家族思いになった父親や子供たちを大切にしようになった母親、バンクス一家の楽しそうな姿を見守りながら、メリー・ポピンズは子供たちに別れも告げず、風に乗って空へと消えていきました。子供たちは見送りもせず、気付くことさえありませんでした。

あれだけメリーになついていた子供たちも、やはり両親の愛情が一番だったのでしょうし、このラストシーンからは、何よりも、メリー自身が自分の立場や役割を深く自覚していることを感じさせられました。メリーは、また、自分を必要としている次の子供たちのために旅立ちます。

教員（特に学級担任）も、受け持ちの子供たちにとってはそれぞれに特別で、必要とされる存在ですし、大きな影響を与えることもあるでしょう。子供たちに対する教育者としての愛情も必要であり、子供との心からの信頼関係も大切です。しかし、その愛情は保護者の愛情とは異なるものですし、責任を持てる期間は限られており、教員が与える影響は、子供たちの自由を縛ったり可能性を狭めるものであってはいけません。子供達には、常に新たな出会いが待っています。

教員は担当する期間、大切な子供たちを責任を持って預かり、真にその子のためを思い、愛情を持って指導します。それは職務ではありますが、当然、個人的な感情としての愛着が芽生えることは避けられません。また、特に学級担任は、毎日一緒に活動する中で、自分なりのやり方や、自分と子供たちとの特別な関係、阿吽の呼吸といったものが生まれるもので、それが教育効果を高めることにもつながるものです。しかし最後には、しっかりと、子供たちとの「お別れ」をしなければなりません。それは、学んだ内容や約束を自分との関係から切り離して普遍的な価値として一般化し、子供たちにとって大切な次の出会い、新たな出会いを受け入れる「心の自由」を保障するためです。これは教員として忘れてはならない作業で、子供たちにかけて「魔法を解く」という言い方をすることもあります。

子供たちの将来のため、その子供たちが担う未来の社会のための教育です。自分を踏み台にして大きく羽ばたいてほしいと願いながら、私もこれまで、たくさんの子供たちとお別れしてきました。今年度も、そんな時期がやって来ます。

..... 切り取り線

学校の教育活動への御意見・御要望・御提案・御感想、 校長に知らせたいこと など

2022年3月4日（ ）年（ ）組 児童氏名